

山寺ふるさと便り

=第27号=

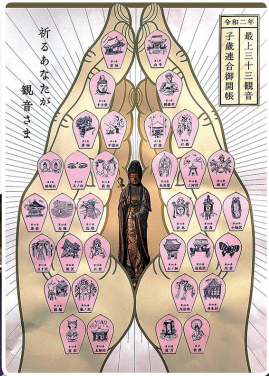
宝珠のしずく

題字 後藤仁田(性相院)

発行所 やまでら館

〒999-3301 山形市山寺517-1
TEL 023-695-2001 FAX 023-695-2164

発行者 山寺地区振興会
編集 宝珠のしずく編集委員会



最上三十三観音第二番

宝珠山千手院、垂水遺跡界限

多くの参拝者で賑わう



コロナ禍で繰り延べになっていた最上三十三観音子年連合御開帳が令和4年5月1日〜10月31日まで実施できました★御開帳に県内外の方々から御参拝頂き、心から感謝申し上げます★当宝珠山千手院御本尊千手観世音菩薩も、にこやかにご参拝頂き、安堵して下さっておられることでしょう★また、長い期間、ご参拝者への接待に当られた別当会会長後藤弥一郎さんはじめ、別当会の皆さん、ご苦労様でした。心のこもったご接待の数々大変好評を博し、地元山寺地区民、喜び一杯です。

★この度の御開帳に嬉しいことが三つありました。一つ、千手観世音菩薩へのご参拝者が多かったこと。もう一つ、県外のご参拝者の多くが垂水遺跡界限（大小無数の洞穴を有する東西約200mの岩壁に古峯神社、稲荷神社、不動尊菩薩を祀り、山寺草創期の面影を残す処）へ山路を踏みしめてお上り頂いたこと、垂水界限に祀られている神仏も、ご満悦のことでしょう。三つ目は数多くの御開帳参拝歓迎幟旗でお迎えできたこと、地元山寺として大きな喜びです。

★山寺の皆さん、参拝者から頂いたご縁の力添え、今後の地区の振興・発展に結び付けていきたいと思います。



時正官書記所判裁

写真の方が、「山寺風土略記」の著者伊藤友信氏。『山寺村風土略記』(以後、風土略記と略す)。

原文は、カタカナ・漢字交じりの文語体で綴られている。紹介するに当たって、ひらがな・漢字交じりの口語体に翻訳し小見出しを附してみた。息子、信之氏は「山寺村風土略記」序文に、

『故人友信が書き遺した文(ふみ)の中に『山寺村風土略記』という一編がある。これは、故人が以前山寺学校に奉職中に書きとめた小文である。友信は日記の中で、もともとこの文は、ほんの手慰みに気の向くまま書いたものなので、人に見せるものではないと書いている。それだから、行李(こうり)の中にしまいこんでいた。この度、故人の教え子とその外の人たちが相談して碑を建て、その記念に出版をしたいので、お許し願いたいとの伺いがあった。本当に有難いことなので快く承諾した。この出版は、故人の遺志に背くようであるが、むしろ、逆に山寺に

光を当てることになるのではないかと考えられる。

山寺は天下に珍しい景観の優れた稀な地である。それなのに名が知られないのは、一つは山寺が僻地であり、書き記し、知らそうとする人がいなかったからではなかったのか。この小文は、何度も読み返し、推敲(書き直し)を重ねたものではないので、抜け落ちや、誤りが多いかもしれない。しかし、少しでも世間から注目されて、誰かによって推敲を重ね完全なものにして頂けたら、ほんの少しでも山寺の役に立つことがあるのではないか。

この度の出版で、故人の志が無駄にならないですむのではないかと思っている。自分は、今回の出版に尽力された方々に謹んで感謝申し上げる」と記している。

風土略記は、原稿用紙(四百字詰)二十枚程の冊子である。記述内容は明治19年4月、明治20年11月の山寺の状況を立石寺、村の風土・人情・

伊藤友信先生を偲ぶ <Ver2>

『山寺村風土略記』

方言・等を記録したもので、山寺を語る史的価値の高いものである。まず、「☆山寺の集落」の記述を紹介しよう。

☆山寺の集落

『山寺村が何時の頃から開けたものかは、現在では、はっきりしたことはわからない。しかし、世間一般では、慈覺大師円仁が山寺山に宝珠山立石寺を開山した時からではないかと云われている。』

山寺村は東村山郡の最も東端にある山村で、宮城県名取郡と境を接している。この村の総段別は二百五十五町九段二十歩。総地価金五万二千七百九十余にして、戸数三百七十六戸、人口二千三百二十六人、内男千八百八十九人、女千百三十七人。

往昔、山寺村は七院に分けられていた。即ち中院・南院、この二院は、今川原町と呼び、戸数は合計六十九戸である。安養院、今の宮崎・地藏堂を指し、戸数六十一戸。芦澤院、今も呼名は変わらず、戸数四十四戸。馬形院、今の呼び名はただ馬形となつて、戸数五十戸。千手院は今も呼び名は同じで、戸数六十六戸。山王院は、今所部と呼び、戸数四十八戸である。

地藏堂と云うのは、山寺村の最も西端にある。道は山形より来るもの

と、天童より来るものと二筋がここ地藏堂で出合い一筋となる。是より東は宮崎である。宮崎より南に行く道があり、芦澤に至る。又宮崎より東に進めば川原町に至る。川原町の中程に南に行く道に橋を架け、高橋と呼んでいる。この道の先は馬形になる。馬形よりさらに東に進むと二口峠に至る。仙臺の行き還りはこの道を通ることになる。高橋を渡らずに東に進めば、川原町のはずれで道が二筋に分かれ、右は所部へ、左は千手院に行く。道路の殆んどが険しく、村内の所々に坂道がある。

山寺の季節は里の方と余り変わりはないが、山里だけに寒く、季節の移り変わりが異なる。即ち、春は長く雪は消えない。夏は暑も短い。秋は早やく紅葉し、冬は雪が降るのが早い。しかし、風の吹く日は、全般に少なく感じられる(鶴岡と比較して)。

(28号に続く)

